幼稚園でしてゐること（五）

——唱歌——

倉橋惣三

「今日は大層お靜かで。お休みでせうかと思ひました」

「こんなに、子どもが騷いでゐますのに」

「いゝえ。いつものピヤノの音がしませんので」

「ハ、ア」

「ピヤノが聞えませんと、幼稚園らしくございませんね」

「ハ、ア」

「いやですねえ先生、ハ、ア、ハ、アばかりおつしやつて。ほんとにそうぢやございませんの」

「ハ、ア」

「あらまた」

「ピヤノの音は幼稚園の氣分を出しますね。しかし、幼稚園だつて始終音樂ばかりしてゐる譯ぢやありませんよ。音樂學校ぢやないのですから」

「またあんなことおつしやつて。そりやあ、舞踊學校でないと、先達つてもおつしやいましたやうに、音樂學校ぢやございませんことは存じてゐますが」

「そうなんです。がね、こう申したからつて、幼稚園で音樂を輕く見てゐるのでは決してありませんですよ。たゞ、幼稚園といへば、遊戯と唱歌と考へてゐたりする藝術教育主義者、乃至お慰み主義者には、贊成出來ないといふ丈けのことです」

十二月の獻立

榮養研究所　佐々木理喜子

御寒くなりましたので體の溫まる御汁を作りませう。うどんを用ひて代用食にも役に立つ樣に、工夫します。さつまいもで簡單なお八つを作りましたが、御子樣達はきつと喜んで下さいます。

（一）スチュウうどん

材料　うどん玉二〇〇瓦　豚肉三〇瓦　馬鈴薯三〇瓦　人參一五瓦　玉葱三〇瓦　油六瓦　片栗粉三瓦　以上で蛋白質一三・九瓦。溫量　三三一カロリー

作り方　うどんは少し短く切り、さつと御湯を通し丼に盛付け、次のスチュウを上からかけます。豚肉、ポテト、人參、玉葱は程よく切り、油でさつと炒め、ポテト、人參を鍋に入れて汁をたつぷり入れて煮ます。軟くなつた時に、豚肉、玉葱を入れ、よく煮て、鹽で味をつけ、醬油を少し加へます。子供には胡椒は用ひません。

「ハ、ア」

「こんどは、あなたの方がハ、アですか。併し、幼兒教育に音樂は非常に大切な役割をもつもので、いゝ曲譜の唱歌を歌はせることは極く必要です。のべつ幕なしではなく、いろ〳〵のお仕事の間にはさんでね」

「どの程度にお教へになるんですか」

「教へるといふ程でもないのですが、歌はせる以上、成るべく正しく歌はせたいものですね。そうしないと、第一、耳が惡くなりますし」

「へ、エ中耳炎にでも」

「まさか。耳の練習が出來ないのですね。音樂の第一は耳ですからね。聽音が正しく出來て、それで正しく歌へるのですからね」

「音階練習から」

「それも大きい子には、していゝことでせうが、大抵は直ぐ曲を歌はせます。子どもがその方が好きですし、歌ひたい心をもとにして指導出來ますからね。實際子どもは、歌ふのを好みますから」

「そう致しますと、先生がいつも言はれるやうに、唱歌も、子どもの歌ひたい心を充たしてやるのが第一なのでございますね」

「そうそ、全くそうですよ。たゞね、音樂は他のことゝ違つて、耳の教育といふ點で、正しい歌ひ方を聽かせ、正しい歌ひ方をさせなければならぬところに、幼稚園としての苦心があるのです。幼稚園時代から、何も上手な歌うたひに仕込むことはいらないのですが、正しくない音や、亂れた譜で、耳を誤らせることは、してならないことですから」

「さようでございませうね」

「ですから、無暗に澤山歌はせるばかりがいゝといふ譯にゆかず、そういふことは却つてよくなかつたりするのです。但し、幼兒に、そうやかましく音樂的練習をさせることは出來ませんし、自然、歌ひたい心の方を主にして、一方のことを注意するといふ具合になります」

「天才もゐませうね」

「そうですよ。音樂などいふことにな

(二)里芋と鱈の子

材料　里芋四〇瓦　鱈の子二〇瓦　油揚一〇瓦　白菜三〇瓦　人參一〇瓦　以上蛋白質八・七瓦、溫量一〇六カロリー

作り方　里芋は皮のきたない所だけとつて普通に切つて煮付けます。鱈の子は外の皮を切つて煮付け、鹽、砂糖で味付け、ポロ〳〵にして里芋にまぶします。油揚は細く切り、白菜、人參も纖切り、一緒に煮付け下汁の出ない樣にかち〳〵にして、里芋に附合せます。

(三)さつまいものお饅頭

材料　さつまいも一〇〇瓦　片栗粉一二瓦　砂糖少々、以上で一五四カロリー、(一回分のお八つの量)

作り方　さつまいもは普通に蒸して、皮を取りよくつぶします。砂糖と鹽を加へて餡の樣に煉ります。一人分を三個に丸め、片栗粉をよくまぶして、御飯蒸しで十五分蒸します。片栗粉で薄い皮が出來ます。經木か、紙を一寸角に切つて此の上にのせて蒸しますと、蒸し釜につかないでよろしうございます。

ると、皆同じといふ譯にゆきません。天才的な子がゐたら、それを正しく發見して、又特別な指導を考へなければなりません。併し、それは一般の保姆さんでは、中々むづかしいことです。殊に發見がね」

「そうでございませうね」

「發見し得ないのも濟まんことですが、一寸ばかり聲がいゝとか、器用だとかいふので、天才扱ひも困りますからね。それが、當節、相當危險なのです。ラヂオ用小音樂家としてなどね」

「天才の反對に、全く歌へなかつたり、きらひだつたりする子もありませうね」

「ありますね。たゞ、幼稚園としては、出來るだけ或程度迄の教育はしたいのですから、そういふ子も、容易にだめだとしては仕舞ひません。殊にそういふ子ども、つまり嚴密なピヤノ的音律に適しなくても、太鼓とか、時には、もつと雜な音律でゞも、リズムの教育は是非したいし、出來るものです」

「いつか樂隊でしてゐらつしやいましたね」

「あれも、そういふ子を導いてゆくにいいやうですよ。リズム丈けは一通りのところまで教育したいですね。それは、ただ音樂ばかりでなく、全體の教養に大きな關係をもちますからね」

「リトミックスですか」

「そこまでは兎に角く、リズムを感じ、リズムを解し、リズム的に生活し得ることは、確に教養の一要素ですから」

「あ、ピヤノが聞えてゐますね。これから唱歌でせうか。一寸違ひますね」

「あれは、音感教育を試みてゐるのです。絶對音といふので、近來いろ〳〵の意味で主張されてゐるのですが、幼兒期にどこまで適切か、可能にしても、全體の教育とどう關係するか、今はまだ實驗してゐるところです。これは、研究の上で、またお話いたしませう」

「幼稚園でしてゐらつしやることに就て、いろ〳〵と、なが〳〵有り難うございました。またくわしく教へて頂きます」

立ちばなし

寒中の竹の子

鍛錬といふとさも嚴しいことのやうですが、寒からう〳〵で包み過ぎ、護り過ぎて厚着の習慣をつけるのも、少くも程々にしなければなりますまい。幼稚園などで時々斯ういふ子どもが目につきます。厚い肌着、厚い眞綿、厚い毛絲、厚いものを幾枚も〳〵厚く重ねて、ぬく〳〵とふくらんでゐる子です。あんまり着重りで動くことも出來ないのもあれば、それで動くので、下は汗でじつとりと蒸れてゐるのもあります。どつちにしても、却つて風をひき易くしてある譯になります。

昔、支那に、寒中雪を掘つて親の好物の竹の子を取り出した孝子があつたそうですが、これはまた、わが子を寒中の竹の子にする親です。わが子に寒中竹の子を要求する親も親ですが、わが子を季節はずれの竹の子にする親も親ですね。